

|          |  |
|----------|--|
| 会議名      | (平成16年度第5回) 第469回技術情報交流セミナー  |
| 開催日時     | 平成16年11月12日(金) 14:00~16:00   |
| 開催場所     | 製粉会館6階会議室(中央区日本橋兜町)  |
| 主催者      | (社)農林水産技術情報協会(情報システム部)   |
| 参加人数(概数) | 約40名(都道府県13、民間12、団体5、在日米海軍1、情報協会)  |
| 1. 会議の概要 | <p>「有機畜産物JAS規格の日本の特徴と今後の展望」<br/> 講師; 東京農工大学 農学部 特別研究員 横田 茂永 氏</p> <p>2001年7月にコーデックス委員会で有機畜産物の国際基準が採択されたのを受けて日本でも有機畜産物の日本農林規格(JAS規格)制定に向けた取り組みが始まった。そして、このほど有機畜産物及び有機農産物飼料のJAS規格案がまとまった。</p> <p>このJAS規格案のコーデックスガイドラインとは異なる日本の特徴についてコメントした。</p> <p><b>1. 有機JAS認証制度の概要</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 有機畜産物JAS規格制定までの経過</li> <li>2) 有機JAS認定の仕組み</li> <li>3) 有機JAS認定制度の日本の特徴(EUの制度との比較を参考にして)</li> </ol> <p><b>2. 有機畜産物JAS規格の日本の特徴</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 有機畜産物のJAS規格の概要(別紙資料)</li> <li>2) 有機畜産物JAS規格の日本の特徴</li> </ol> <p><b>3. 日本の有機畜産の現状</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 日本の有機畜産の現状</li> <li>2) 参考としての有機認定及び有機所気品の流通の現状</li> </ol> <p><b>4. 有機畜産物JAS規格の課題と今後の展望</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 有機畜産物JAS規格の課題</li> <li>2) 今後の展望</li> </ol> |

|                                 |  |
|---------------------------------|--|
| <p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる事項</p> | <p><b>1. 1) 有機畜産物 J A S 規格制定までの経過</b></p> <p>2001年7月;コーデックス委員会 (F A O / W H O 合同食品企画委員会) が有機畜産物のガイドラインを制定。</p> <p>同年8月;中央畜産会に「有機畜産物に関する検討会」設置。</p> <p>2003年3月;上記検討会のとりまとめを受けて、農水省は農林物資規格調査会有機畜産部会を開催し、有機畜産物及び有機畜産物加工食品の J A S 規格の検討を開始。同年9月、有機飼料部会を別途設置。</p> <p>2004年4月;有機畜産部会が、J A S 規格案の J A S 調査会への報告を了承。同年夏、有機畜産物、有機畜産物飼料、有機加工飼料の J A S 規格の制定と有機農産物加工食品の J A S 規格改正案についてパブリックコメントを募集。現在、J A S 規格調査会総会で審議中。</p> <p>05年1月;施行見込み。</p> <p><b>1. 2) 有機 J A S 認定の仕組み</b></p> <p>登録認定機関 (事務局、判定員、検査員) の登録・認可を農林水産大臣に申請。</p> <p>申請者 (生産者; 生産工程管理者、加工業者; 製造業者、流通業者; 小分け業者、輸入業者) が登録認定機関に申請、検査依頼して認定を受ける。</p> <p><b>1. 3) 有機 J A S 認定制度の日本的特徴 (E U の制度との比較を参考にして)</b></p> <p>J A S 法の一部。システム認証、品質保証を自己責任で。</p> <p><b>2. 1) 有機畜産物の J A S 規格の概要 (別紙資料)</b></p> <p>有機農産物の日本農林規格が下敷き。</p> <p><b>2. 2) 有機畜産物 J A S 規格の日本的特徴</b></p> <p>有機農業の規格ではなく、個々の有機畜産物・有機食品の規格。アニマルウェルフェアにまでは踏み込んでいない。</p> <p><b>3. 1) 日本の有機畜産の現状</b></p> <p>輸入有機畜産物と比べた現状の日本の有機畜産;<br/>圃場が零細で分散、有機飼料利用に限界、地域資源利用の未確立。</p> <p><b>3. 2) 参考としての有機認定及び有機食品の流通の現状</b></p> <p>有機認定; 外国認定生産工程管理者数、外国農家数の増加。<br/>輸入有機食品の増加と囲う原料の海外依存。<br/>いずれ、有機畜産物でも?</p> <p><b>4. 1) 有機畜産物 J A S 規格の課題</b></p> <p>①飼養施設条件の課題; 追加投資<br/>②飼料給与の課題; 有機飼料、有機流通飼料の確保<br/>③一般管理及び健康管理の課題; 防疫のための閉鎖性との矛盾等</p> <p><b>4. 2) 今後の展望</b></p> <p>有機畜産物自体の課題と共に認定取得の経済的でメリットやメリットの欠落の問題がある。</p> <p>① 内部規定の整備や記録整理に費やす追加労働<br/>②飼育や捕縄管理の厳密化による労働強化</p> |
|---------------------------------|--|

|                                  |   |
|----------------------------------|---|
|                                  | <p>③認定費用に見合った価格が保証されていない現状を打破できるか<br/> 有機畜産物の J A S 認定取得について必ずしも明るくはないが、有機畜産物の展望が開けるとすれば、</p> <p>①家畜排泄物法の完全実施<br/> ②耕畜連携の強化<br/> ③放牧のメリットへの注目<br/> ④遊休農地対策の進展</p> <p>さらに、食品の安全性や環境に対する問題意識の高まり、ある程度の価格プレミアムが加わったとき、有機畜産の J A S 認定を取得する農家が出てくる可能性もあるだろう、と演者は締めくくった。</p>                    |
| <p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・わが国における有機畜産物の生産について明るい展望がないとしても、登録認定機関に名乗りを上げる団体が現れるものと予測される。畜産技術協会も登録・認定をうけることを検討する必要があると思われる。(中間法人か?)。</li> <li>・今回の J A S 規格は、欧米におけるアニマルウェルフェアにまでは踏み込んでいないことに、注意しておく必要がある。わが国における有機畜産物生産に係る論議においても、アニマルウェルフェアの問題との間に一線を設けて置く必要があろう。</li> </ul> |
| <p>4. 研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・有機畜産物生産関連課題の採択に際しては、わが国における問題点に十分留意して、慎重に対処する必要があるだろう。</li> </ul>   |
| <p>報告者</p>                       | <p>針生 程吉</p>  |